

身近な障害者の存在と パラスポーツ接触（する、みる、支える）の関連 — インターネット調査報告 —

本 多 敏 明^{*}

はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）流行以前は、2020年7月から9月にかけて2020東京オリンピック・パラリンピック（以下、2020東京オリパラ）が開催予定であった。日本ではまだ大会延期の可能性すらなかった開催半年前にあたる2020年1月下旬に、全47都道府県の20～69歳男女4,000人を対象として、パラスポーツの接触機会および接触意欲等に関するインターネット調査を実施した。本稿はその結果報告である。

主に4点述べる。（1）首都圏（東京・埼玉・千葉・神奈川）、その他開催地（北海道や静岡等の5道県）、非開催地（38府県）の3つに分けた分析を行ったところ、この地域の分類では有意な結果が得られなかった。パラスポーツ接触経験ならびに接触意欲ともに大半が低いと考えられる。（2）次に本多（2019）に引き続き「身内」および「身近」な障害者の有無を4群に分けて分析した結果、「身近」に障害者（友人や仕事等で継続的に関わりがある身体障害者手帳保持者）がいる2つの群（「身内&身近」群（130人）および「身近のみ」群（272人））は、「身内のみ（本人および／または同居家族に身体障害者手帳保持者がいる）」群（331人）と「（身内にも身近にも）いない群」（3,523人）と比べて、パラスポーツ接触経験ならびに意欲が有意に高かった。ただし「身近」に障害者がいるとパラスポーツ接触度合いは高まるが、「身内のみ」では高まらない（「いない」群とほぼ同程度）ことが示唆された。（3）さらにパラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析の結果、千葉県民のみを対象とした本多（2019）と同様に、「日常スポーツ接触」「文化資本」「ボランティア関心」が、またパラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析では「日常スポーツ接触」「ボランティア関心」が有意に影響を与えており、これらは全国的にみてもパラスポーツ接触の有力な「入口」と考えられる。本稿の分析結果からは、パラスポーツを一緒にみたりプレイする障害のある人が同居家族以外にいることが最もパラスポーツ接触を呼び寄せる

^{*}コミュニティ政策学部 准教授

といえる。また(4) 今回の調査時期がパラスポーツ接触に対して強い影響を及ぼしていると考えられることから、2020東京オリパラ終了数年後に追跡調査を行うことが「レガシー」のひとつを把握するために必要と考えられる。

キーワード：パラスポーツ接触経験, パラスポーツ接触意欲, 身近な障害者

I. 問題の背景 ——開催地／非開催地の比較, 身近な障害者の有無の精緻化——

2020東京オリパラは、東京都を含む9都道県で開催予定であった。開催地であることが決まった各開催地は機運を盛り上げるために、産官学を挙げて住民の競技理解を促進する取組や、特にパラリンピックに関しては障害(者)理解の推進を図るべく取組を行ってきた。

こうした状況を背景として、本多(2019)は、オリンピック4競技およびパラリンピック4競技が開催予定の千葉県内の20~69歳の男女1,000人を対象として、パラスポーツの接触経験および接触意欲に影響を与える要因を調査し分析した(以下、前回調査と呼ぶ)。その結果、前回調査からは次の知見が得られた。すなわち、パラスポーツ接触経験(する, みる)ならびに接触意欲(したい, みたい)のそれぞれを従属変数とする重回帰分析の結果、経験と意欲の双方に大きな影響を与えているのは、「日常的なスポーツ接触」(する, みる)経験および福祉や教育等の「ボランティア一般への関心」であった。このことからパラスポーツの「入口」には「スポーツ」として接触するルートと、「ボランティア一般への関心」(相互的支援の関心)から接触するルートという2つのルートが想定された。それゆえ、パラスポーツのさらなる普及のためには、そのいずれかのルートにターゲットを絞らずにパラスポーツ接触の機会を提供していくことが効果的と考えられることを指摘した。

しかしながら、前回調査の回答者がオリンピック・パラリンピック合わせて8競技という東京都以外では最も多い開催県である千葉県在住者に限られていることからそうした地域の影響が大きいことが見込まれた。そこで今回の調査では、調査対象者を全国に広げ、前回調査では行えなかったオリンピック・パラリンピック競技の開催地と非開催地での違いを探ることを目的のひとつとした。2020東京オリパラでは、9都道県が開催地となっているが(表1参照)、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県は2020東京オリパラに関して地理の面や広域自治体の規模等の面から突出したひとつの「まとめり」として捉えたほうが妥当であることから、「首都圏」と「他開催地」(北海道、宮城県、福島県、茨城県、静岡県)に分けた¹⁾。

次に、前回調査で行った身近な障害者の存在の有無による分析をさらに精緻化することが本稿の二つ目の目的である。前回調査では、障害者との接触経験があるほうがパラスポーツ接触にポジティブな影響を与えるという先行研究の知見をさらに展開すべく、身近な障害者の有無を「身内」「身近」「いない」の3群に分けた。先行研究では身近に障害者が「いる」

表1 2020東京オリンピック・パラリンピック競技開催地

開催地	オリ／パラ	競技名（オリ／パラ）	会場（オリ／パラ）
北海道	オリ	陸上競技（マラソン、競歩）、サッカー	札幌大通り公園、札幌ドーム
宮城県	オリ	サッカー	宮城スタジアム
福島県	オリ	野球・ソフトボール	福島あづま球場
茨城県	オリ	サッカー	茨城カシマスタジアム
埼玉県	オリ	サッカー、バスケットボール、ゴルフ	埼玉スタジアム2002、埼玉スーパーアリーナ、霞ヶ関カンツリー倶楽部
千葉県	オリ／パラ	テコンドー、レスリング、フェンシング、サーフィン／パラテコンドー、車いすフェンシング、シッティングバレー、ゴールボール	幕張メッセ、釣ヶ崎海岸サーフィンビーチ／幕張メッセ
東京都	オリ／パラ	陸上競技他23競技（省略）／陸上競技他16競技（省略）	オリンピックスタジアム他24会場／オリンピックスタジアム他17会場
神奈川県	オリ	サッカー、セーリング	横浜国際総合競技場、神奈川県ヨットハーバー
静岡県	オリ／パラ	自転車競技／自転車競技	伊豆ベロドローム、伊豆MTBコース、富士スピードウェイ（オリ／パラ同会場）

出典：東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会HP

「いない」の2群で分析がなされていたのに対して、本多（2019）は「いる」群をさらに「身内」（本人および／または同居家族）と「身近」（友人や親戚等）に細分化した。その結果、「身内」（本人および／または同居家族に障害者手帳保持者がいる）群と「身近」（友人や親戚等にはのみ障害者手帳保持者がいる）群が、「いない」群と比べてパラスポーツの接触経験ならびに接触意欲が有意に高かった。また「身内」群では「狭く・深く」、そして「身近」群では「広く・浅く」とでも表現できる微妙な違いが窺われた。ただし、統計分析に耐えられるサンプル数を確保するために、本人や家族に障害者がいれば、友人等に障害のある人がいても「身内」に統合せざるをえなかった等の課題が残り、より精緻化した分析が待たれた。今回の調査ではサンプル数を4,000人規模にまで増加できたため、身近な障害者の有無を前回調査よりも精緻化して分析を行った。

II. 調査の概要

全国の20歳から69歳の男女4,000人を対象として、パラスポーツの接触経験や接触意欲、2020年の東京オリンピック・パラリンピック接触意欲に関するインターネット調査を実施した。合計4,000人を目標とするため、総務省統計局「人口推計（2019年7月1日確定値）」をもとに算出した結果が、表2である。

本稿で使用するデータを得た調査の概要は以下のとおりである。

1. 調査概要

調査名：パラスポーツ・パラリンピックに関する調査

調査対象：株式会社クロス・マーケティングのモニター会員の全国の20歳から69歳の男女
4,000人

調査方法：インターネットリサーチ

調査期間：2020年1月24日(金)17時45分ごろから1月26日(日)15時30分ごろ。

なお、調査開始日は「東京2020オリンピック開幕200日前」にあたり各テレビ番組等でその旨が報道された日であった。

回収数：4,327サンプル。データチェックの結果、回答に矛盾(例えば、一人暮らしと回答しているのに、同居家族がいると回答している等)や機械的な回答と考えられる71サンプルを除いた、4,256サンプルを分析対象とした(表3)。なお、都道府県ごとの回答者の割合は全体的にみれば大きな偏りはなかったが、「首都圏」が10%以上多くなっている(表4)。

表2 対象人口とサンプル割付

(単位：人)

	年齢	男	女	計
対象人口	20-29	6,502,000	6,114,000	12,617,000
	30-39	7,317,000	7,079,000	14,396,000
	40-49	9,389,000	9,174,000	18,565,000
	50-59	8,109,000	8,074,000	16,184,000
	60-69	8,018,000	8,400,000	16,418,000
	全体(20-69)	39,335,000	38,841,000	78,180,000
	サンプル割付数	20-29	333	313
30-39		374	362	736
40-49		481	469	950
50-59		415	413	828
60-69		410	430	840
全体(20-69)		2,013	1,987	4,000

表3 有効サンプル数

(単位：人)

年齢	男	女	計
20-29	358	333	691
30-39	386	382	768
40-49	515	502	1,017
50-59	438	438	876
60-69	440	464	904
全体(20-69)	2,137	2,119	4,256

表4 開催地別「人口統計」と有効サンプル数の比較

	本調査			総務省統計局「人口推計」 (2019年7月1日確定値)	
	有効サンプル数(人)	割合	割合の差	20-69歳(千人)	割合
首都圏(東京・埼玉・千葉・神奈川)	1,440	33.83%	11.06%	17,971	22.77%
他開催地(北海道・宮城・福島・茨城・静岡)	507	11.91%	-0.64%	9,910	12.56%
非開催地(38府県)	2,309	54.25%	-10.42%	51,039	64.67%
全国	4,256	100.00%		78,920	100.00%

調査項目は、2020東京オリンピック・パラリンピック接触意欲、パラスポーツ接触経験、パラスポーツ接触意欲、文化資本、日常的なスポーツ接触、ボランティア活動への関心、地域交流感、一般的信頼、主観的健康感、主観的階層帰属意識、ソーシャルサポート、身近な障害者の有無等である。フェイス項目は、年に1回の更新がなされるモニターの基本属性(年齢、性別、世帯年収等)を用いる。

2. 倫理的配慮

本調査の実施にあたっては「淑徳大学研究倫理規準」に基づいて倫理的配慮を行った。調査の回答が始まる前に、「デリケートな内容」が含まれる旨を明記しており、また回答途中での取消もいつでもできるため、調査協力は任意といえる。

Ⅲ. 開催地別の分析

1. 開催地の分類

まずは開催地別にパラスポーツ接触経験ならびに接触意欲に違いがみられるかを分析する。先述のとおり開催地は次の3群に分けた（表5）。

表5 開催地別有効サンプル数（再掲）

首都圏（東京・埼玉・千葉・神奈川）	1,440人	33.8%
他開催地（北海道・宮城・福島・茨城・静岡）	507人	11.9%
非開催地（38府県）	2,309人	54.3%

2. 開催地別の基礎集計

開催地別3群それぞれの基礎集計は表6のとおりである。モニター登録のデータを元に、年齢は「20-34歳」「35-49歳」「50-69歳」の3群、また世帯年収は「300万円未満」「300-400万円未満」「400-700万円未満」「700-1,100万円未満」「1,100万円以上」の5群に分けた。カイ二乗検定の結果、「世帯年収」や学歴（大卒）は「首都圏」が多く、「戸建て」や「同居家族」および「友人等」が障害者手帳保持者で「首都圏」が有意に少なかった。

表6 開催地別基礎集計

	首都圏		他開催地		非開催地		
	人数	%	人数	%	人数	%	
性別（男性=1）	†	756	52.5	253	49.9	1,128	48.9
年齢	†						
20-34歳		317	22.0	130	25.6	581	25.2
35-49歳		481	33.4	172	33.9	795	34.4
50-69歳		581	44.6	205	40.4	933	40.4
世帯年収	***						
300万円未満		207	14.4	108	21.3	397	17.2
300-400万円未満		154	10.7	66	13.0	274	11.9
400-700万円未満		334	23.2	133	26.2	580	25.1
700-1,100万円未満		286	19.9	63	12.4	358	15.5
1,100万円以上		133	9.2	15	3.0	115	5.0
無回答（欠損値）		326	22.6	122	24.1	585	25.3
大卒（在学中含む）（=1）	***	801	55.6	204	40.2	1,043	45.2
一人暮らし（=1）	*	276	19.2	88	17.4	360	15.6
戸建て（=1）	***	656	45.6	309	60.9	1,366	59.2
持家（=1）		909	63.1	328	64.7	1,500	65.0
自身が障害者手帳保持		63	4.4	32	6.6	123	5.3
同居家族が障害者手帳保持	**	71	4.9	41	8.1	165	7.1
友人等が障害者手帳保持	*	112	7.8	46	9.1	244	10.6
N		1,440		507		2,309	

† : p < .10 * : p < .05 ** : p < .01 *** : p < .001

3. 開催地別のパラスポーツ接触経験および接触意欲のクロス集計

(1) パラスポーツ接触経験 (する, みる, 支える)

パラスポーツおよび(元)選手との接触経験を捉えるため、以下の10項目を用意した。「テレビやインターネット(動画配信)でパラスポーツの試合を見たことがある」「テレビやインターネット(動画配信)でパラスポーツの競技や選手の特集番組等を見たことがある」「新聞や雑誌でパラスポーツの競技や選手に関する記事を読んだことがある」「競技場や体育館, スタジアムなどでパラスポーツを観戦したことがある」「パラスポーツを体験したことがある」「パラスポーツのボランティアをしたことがある」。以上の6項目がパラスポーツ接触経験, 以下の4項目が(元)選手との接触経験である。「パラスポーツ(元)選手の講演を会場で聞いたことがある」「パラスポーツ(元)選手と会話をしたことがある」「パラスポーツ(元)選手と一緒に写真を撮ったことがある」「パラスポーツ(元)選手のSNSをフォローしたり, ブログを閲覧したことがある」。回答は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で尋ね, クロス集計を行った(表7)。その結果, 8項目で有意な差はなく, 「みる」の2項目のみで傾向差がみられた。それはテレビ等や新聞等で「みる」という偶然に目にしたなどの意図しない, 比較的労力を要しない経験である。それに対して, 競技場で「みる」も「する」も「支える」も意図的に行動しなければできないことはどの地域でも3~5%と大変少ない現状であるため有意差はみられなかった。したがって, パラスポーツ接触経験について開催地による違いはみられなかった。

表7 開催地別パラスポーツ接触経験のクロス集計(抜粋)

		あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	χ^2 値	P値	
【みる】	首都圏 (n=1,440)	10.1	14.2	13.3	62.4			
テレビやインターネット(動画配信)でパラスポーツの試合を見たことがある	他開催地 (n=507)	12.4	12.2	10.3	65.1	12.023	0.061	†
	非開催地 (n=2,309)	8.9	13.4	11.7	66.0			
【みる】	首都圏 (n=1,440)	1.7	2.8	8.8	86.6			
競技場や体育館, スタジアムなどでパラスポーツを観戦したことがある	他開催地 (n=507)	2.6	2.0	9.3	86.2	3.001	0.809	
	非開催地 (n=2,309)	1.7	2.7	8.7	86.9			
【みる】	首都圏 (n=1,440)	10.9	17.2	11.3	60.6			
新聞や雑誌でパラスポーツの競技や選手に関する記事を読んだことがある	他開催地 (n=507)	13.2	15.0	11.4	60.4	10.882	0.092	†
	非開催地 (n=2,309)	9.2	15.6	11.4	63.8			
【する】	首都圏 (n=1,440)	2.0	2.9	7.9	87.2			
パラスポーツを体験したことがある	他開催地 (n=507)	1.8	1.6	7.5	89.2	5.840	0.441	
	非開催地 (n=2,309)	1.4	2.6	7.1	88.9			
【支える】	首都圏 (n=1,440)	0.8	1.7	7.6	89.8			
パラスポーツのボランティアをしたことがある	他開催地 (n=507)	0.8	1.2	7.9	90.1	1.439	0.963	
	非開催地 (n=2,309)	0.9	1.8	7.2	90.1			

† : $p < .10$

なお、後述の分析のために前半の6項目について元々の4件法の得点を逆転させ「あてはまる」3点から「あてはまらない」0点としてパラスポーツ接触経験尺度を作成した。得点が高いほどパラスポーツ接触経験が多いことを表す。尺度の信頼性係数は、 $\alpha = 0.723$ だった。

(2) パラスポーツ接触意欲（したい、みたい、支えたい）

パラスポーツ接触意欲を捉えるため、以下の4項目を用意した。「競技場や体育館、スタジアムなどに行って観戦したいパラスポーツがある」「テレビやインターネット（動画配信）で観戦したいパラスポーツがある」「体験したいパラスポーツがある」「ボランティアや支援者（審判、競技スタッフなど）として関わってみたいパラスポーツがある」。回答は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で尋ね、クロス集計を行った（表8）。その結果、「みる」と「する」の3項目で「首都圏」が有意に高く開催地による違いがみられたといえる。

表8 開催地別パラスポーツ接触意欲のクロス集計

		あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	χ^2 値	P値
【みる】 競技場や体育館、スタジアムなどで観戦したいパラスポーツがある	首都圏 (n=1,440)	5.6	11.3	26.5	56.7	37.166	0.000 ***
	他開催地 (n=507)	4.9	7.3	22.3	65.5		
	非開催地 (n=2,309)	3.6	7.4	24.8	64.3		
【みる】 テレビやインターネット（動画配信）で観戦したいパラスポーツがある	首都圏 (n=1,440)	7.2	16.5	24.7	51.7	16.470	0.011 *
	他開催地 (n=507)	7.7	14.0	22.7	55.6		
	非開催地 (n=2,309)	5.4	14.5	22.5	57.6		
【する】 体験したいパラスポーツがある	首都圏 (n=1,440)	4.4	10.1	26.7	58.9	13.600	0.034 *
	他開催地 (n=507)	3.9	7.5	23.9	64.7		
	非開催地 (n=2,309)	3.2	8.0	25.3	63.5		
【支える】 ボランティアや支援者（審判、スタッフ等）として関わりたいパラスポーツがある	首都圏 (n=1,440)	3.1	7.6	27.8	61.5	9.772	0.135
	他開催地 (n=507)	2.2	7.5	24.7	65.7		
	非開催地 (n=2,309)	2.2	6.3	26.1	65.4		

* : $p < .05$ *** : $p < .001$

後述の分析のために、4項目について元々の4件法の得点を逆転させ「あてはまる」3点から「あてはまらない」0点としてパラスポーツ接触意欲尺度を作成した。得点が高いほどパラスポーツ接触意欲が高いことを表す。尺度の信頼性係数は、 $\alpha = 0.919$ だった。

なお、2020東京パラリンピックの接触意欲とクロス集計したところ、「会場での観戦」および「応援したい選手」については「首都圏」が有意に高かった。とりわけ「応援したい選手」についてオリンピックでは開催地別の有意な差がない（全国どこでも4割程度が応援したい選手がいる）のに対して、パラリンピックのみで「首都圏」が有意に高いことから、いわば「開催地効果」がみられた。

表9 開催地別2020東京オリパラ接触意欲のクロス集計

		あてはまる	どちらかといえば あてはまる	どちらかといえば あてはまらない	あてはまらない	χ^2 値	P値
2020東京オリンピックで 応援したい選手やチーム がある	首都圏 (n=1,440)	21.9	22.7	15.3	40.1	10.093	0.121
	他開催地 (n=507)	20.1	23.9	13.6	42.4		
	非開催地 (n=2,309)	18.2	22.7	16.2	43.0		
2020東京パラリンピック で応援したい選手やチー ムがある	首都圏 (n=1,440)	5.9	14.9	25.8	53.3	12.770	0.047 *
	他開催地 (n=507)	6.7	12.4	22.3	58.6		
	非開催地 (n=2,309)	5.4	12.0	25.0	57.6		
2020東京オリンピックを テレビやインターネット (動画配信)で観戦したい	首都圏 (n=1,440)	32.6	28.5	10.7	28.1	16.130	0.013 *
	他開催地 (n=507)	29.8	26.8	9.1	34.3		
	非開催地 (n=2,309)	29.1	26.4	12.0	32.6		
2020東京パラリンピック をテレビやインターネット (動画配信)で観戦したい	首都圏 (n=1,440)	11.9	25.3	21.5	41.3	10.619	0.101
	他開催地 (n=507)	11.6	22.9	18.3	47.1		
	非開催地 (n=2,309)	11.3	22.3	20.5	45.8		
2020東京オリンピックを会 場で観戦したい(チケット がない場合でも希望有無)	首都圏 (n=1,440)	16.9	18.3	19.6	45.2	93.558	0.000 ***
	他開催地 (n=507)	9.7	14.4	18.9	57.0		
	非開催地 (n=2,309)	9.1	12.8	20.2	57.8		
2020東京パラリンピック を会場で観戦したい(チ ケットがない場合でも希 望有無)	首都圏 (n=1,440)	7.8	14.0	24.6	53.5	58.495	0.000 ***
	他開催地 (n=507)	3.7	10.8	21.3	64.1		
	非開催地 (n=2,309)	4.8	8.7	23.8	62.8		

*: p < .05 ***: p < .001

4. 開催地別のパラスポーツ接触経験および接触意欲を従属変数とする重回帰分析

(1) 独立変数として投入する変数の準備

本多 (2019) を参考にパラスポーツ接触経験および接触意欲に影響を与えると考えられる以下の6つの変数を独立変数として投入する。「性別ダミー (女性 = 0, 男性 = 1)」「年齢ダミー (55-69歳が基準)」「文化資本尺度」「日常スポーツ接触尺度」「ボランティア関心尺度」「地域交流感尺度」である。

「年齢」は接触経験および接触意欲に関して直線的な傾向ではなかったため、「20-34歳」「35-49歳」「50-69歳」の3分類とし、「50-69歳」を基準とするダミー変数を作成した。

次に尺度の準備を行う。文化資本を測定する6項目を用いて文化資本尺度を構成した。「美術館や美術の博覧会に行く」「クラシック音楽を聞く」「家で新聞を読む」「本(雑誌や漫画は除く)を読む」「家でお菓子を手作りする」を4件法で尋ね、得点を逆転させて「あてはまる」3点から「あてはまらない」0点とした。すなわち、得点が高いほど文化資本が高いということである。信頼性係数は $\alpha = 0.710$ だった。

二つ目に、日常的なスポーツ接触(する, みる, 支える)を測定する5項目を用いて日常

スポーツ接触尺度を構成した。「日常的にスポーツを行う」「日常的にテレビやインターネット（動画配信）でスポーツの試合を見る」「日常的に競技場や体育館、スタジアムなどの会場にスポーツを観戦に行く」「日常的にスポーツのコーチや審判やマネージャー等の役割を担う」「日常的に家族や友人がスポーツをするための支援（送迎、試合の応援等）をする」を4件法で尋ね、得点を逆転させて「あてはまる」3点から「あてはまらない」0点とした。すなわち、得点が高いほど日常的なスポーツ接触が多いということである。信頼性係数は $\alpha = 0.760$ だった。

三つ目に、ボランティアへの関心を測定する8項目を用いてボランティア関心尺度を構成した。「福祉に関する活動（高齢者、子ども、障がい者などさまざまな生活課題を抱える人への支援など）」「教育関係に関する活動（学校教育や、社会教育・生涯学習活動への協力など）」「スポーツに関する活動（スポーツイベントの運営、少年スポーツの支援活動など）」「国際協力に関する活動（開発途上国への援助、国際機関の募金活動など）」「災害支援に関する活動（災害時の救援・支援、避難者への支援・募金、防災活動など）」「環境保全に関する活動（自然保護、里山保全、リサイクル活動など）」「安全・安心に関する活動（防犯活動、交通安全活動、子どもの見守りなど）」「芸術・文化に関する活動（美術館・博物館での活動、伝統文化の継承・普及活動など）」を4件法で尋ね、得点を逆転させて「関心がある」3点から「関心がない」0点とした。すなわち、得点が高いほどボランティアへの関心が高いということである。信頼性係数は $\alpha = 0.954$ だった。

最後に、居住地の住民の交流度合いの印象を測定する10項目を用いて地域交流感尺度を構成した。「住民同士が挨拶したり立ち話をしている」「日ごろから地域のために活動している人が多い」「ずっとこの地域に住み続けたいと思う住民が多い」「地域に居場所があると感じている住民が多い」「住民は地域のキーパーソン（町内会長、民生委員など）を知っている」「住民は、近所の中学生以下の子どもがどの家の子どもか知っている」「虐待などを知ったら公的機関に通報してくれる住民が多い」「住民は、災害の場合に、1週間ほどなら避難所で問題なく寝食をとることができる」「住民は、交通事故の危険がある地域の場所を把握している」「住民は、犯罪が起こるおそれのある地域の場所を把握している」を4件法で尋ね得点を逆転させて「あてはまる」3点から「あてはまらない」0点とした。得点が高いほど住民同士の交流度合いが高いと感じているということである。信頼性係数は $\alpha = 0.929$ だった。

以上の準備を踏まえて、開催地3群それぞれで重回帰分析を行う。

(2) パラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析

開催地3群ごとにパラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析を行った（表10）。

どのモデルも有意であり、調整済み決定係数（ R^2 ）は0.33、0.34、0.38であった。標準化

表10 開催地別パラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析

投入変数	首都圏		他開催地		非開催地				
	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値			
性別 (男性=1)	-0.01	0.796	-0.01	0.816	0.00	0.948			
年齢 (ref. 50-69歳)									
20-34歳	0.03	0.232	-0.02	0.551	0.06	0.002	**		
35-49歳	0.01	0.790	-0.01	0.892	0.01	0.619			
身近な障害者の有無 (ref. いない)									
自身が障害者	0.04	0.052	†	-0.03	0.414	0.07	0.000	***	
同居家族が障害者	0.02	0.383		0.02	0.692	0.00	0.849		
友人等が障害者	0.03	0.165		0.12	0.002	**	0.07	0.000	***
文化資本	0.17	0.000	***	0.12	0.010	*	0.14	0.000	***
日常スポーツ接触	0.31	0.000	***	0.31	0.000	***	0.33	0.000	***
ボランティア関心	0.20	0.000	***	0.20	0.000	***	0.21	0.000	***
地域交流感	0.07	0.004	*	0.07	0.113		0.11	0.000	***
N	1,440		507		2,309				
p値	p<0.001		p<0.001		p<0.001				
調整済R ²	0.33		0.34		0.38				

† : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

偏回帰係数 (β) をみると、どの地区でも「日常スポーツ接触」「ボランティア関心」「文化資本」の順で高く、開催地3群のあいだに大きな違いはみられなかったといえる。

(3) パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析

次に、パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析を行った (表11)。

どのモデルも有意であり、調整済み決定係数 (R²) は0.38, 0.37, 0.37であった。標準化偏回帰係数 (β) をみると、どの群でも「日常スポーツ接触」「ボランティア関心」の2つが高く、開催地3群のあいだに大きな違いはみられなかったといえる。

以上のことから、開催地は非開催地に比べてパラスポーツ接触意欲が有意に高い結果が一

表11 開催地別パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析

投入変数	首都圏		他開催地		非開催地				
	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値			
性別 (男性=1)	0.00	0.917	-0.08	0.038	*	-0.02	0.350		
年齢 (ref. 50-69歳)									
20-34歳	0.02	0.481	0.04	0.289		0.03	0.127		
35-49歳	0.03	0.159	-0.01	0.791		0.02	0.367		
身近な障害者の有無 (ref. いない)									
自身が障害者	0.04	0.091	†	0.00	0.939	0.01	0.420		
同居家族が障害者	0.00	0.992		0.07	0.054	†	0.00	0.879	
友人等が障害者	0.02	0.326		0.03	0.417		0.02	0.195	
日常スポーツ接触	0.34	0.000	***	0.41	0.000	***	0.38	0.000	***
ボランティア関心	0.33	0.000	***	0.26	0.000	***	0.32	0.000	***
地域交流感	0.08	0.001	**	0.08	0.068	†	0.03	0.088	†
N	1,440		507		2,309				
p値	p<0.001		p<0.001		p<0.001				
調整済R ²	0.38		0.37		0.37				

† : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

部で得られた（表8）ものの、総じて大きな差はみられなかったといえる。2020東京オリパラの数年後に改めて同様の調査を実施することで、開催地にはパラスポーツ接触経験や接触意欲が濃く残っているのか、それとも非開催地と同程度になっているのか、どのような「レガシー」が残っているか（もしくは残っていないのか）の検討は今後の課題としたい。

次に、パラスポーツ接触経験および接触意欲について、本多（2019）に続いて身近な障害者の有無を軸に分析を進めていきたい。

IV. 身近な障害者の有無別の分析

1. 身近な障害者4群の分類と基礎集計

身近な障害者の有無を次の手順で4群に分けた。「自身が障害者手帳を持っている」「障害者手帳を持っている同居家族がいる」「友人や親戚あるいは仕事やボランティアで継続的に関わる人のなかに、障害者手帳所持者がいる」の3つの質問項目を用いる。回答は「あてはまる」「あてはまらない」の2件法のため、 $2 \times 2 \times 2$ の8パターンが得られた（表12）。「本人」または「同居家族」または「友人等（継続的関わり）」のいずれかに障害者（障害者手帳所持者）がいる人は733人（17.2%）であったのに対して、「いない」は3,523人（82.8%）であった。分析にあたって、さらに4分類へと再統合を行った（表13、表14）。

表12 身近な障害者の有無（8分類）

	人数	%
本人のみ	137	3.2
本人と同居家族	18	0.4
同居家族のみ	176	4.1
本人と友人等	47	1.1
本人と同居家族と友人等	16	0.4
同居家族と友人等	67	1.6
友人等のみ	272	6.4
いない	3,523	82.8
合計	4,256	100.0

表13 身近な障害者（4群）

	人数	%
身内のみ	331	7.8
身内&身近	130	3.1
身近のみ	272	6.4
いない	3,523	82.8
合計	4,256	100.0

表14 身近な障害者（4群マトリックス）

		身近	
		友人等継続的な関わり いる	いない
身内、同居家族	いる	身内&身近 (130人, 3.1%)	身内のみ (331人, 7.8%)
	いない	身近のみ (272人, 6.4%)	いない (3,523人, 82.8%)

身近な障害者の有無の4群（以下、身近な障害者4群）の基礎集計は表15のとおりである。職業は「会社勤務（一般社員／管理職／経営者・役員）／公務員・教職員・非営利団体職員／専門職（弁護士・税理士等・医療関連）」「自営業（商工サービス）／農林漁業／SOHO」「派遣社員・契約社員／パート・アルバイト」「主婦」「学生」「無職」の6群に分けた。

身近な障害者4群と各フェイス項目のカイ二乗検定の結果、「性別」「職業」「大卒」「未既

婚」「一人暮らし」「要看護・介護同居家族」の6項目で0.1%水準の有意差がみられた。「身内のみ」(本人や同居家族が身体障害)群はやや男性が多く、既婚が半数にとどまる特徴がみられ、「身内のみ」および「身内&身近」群は無職および要看護・介護同居家族が多く、大卒および一人暮らしが少ない等の特徴がみられた。

表15 身近な障害者(4群)の基礎集計

		身内のみ		身内&身近		身近のみ		いない	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
性別(男性=1)	**	187	56.5	56	43.1	119	43.8	1,775	50.4
年齢									
20-34歳		78	23.6	24	18.5	54	19.9	872	24.8
35-49歳		118	35.6	41	31.5	93	34.2	1,196	33.9
50-69歳		135	40.8	65	50.0	125	46.0	1,455	41.3
職業	***								
会社勤務(一般社員/管理職/経営者・役員)/公務員・教職員・非営利団体職員/専門職		107	33.1	30	23.6	104	39.6	1,447	42.0
自営業(商工サービス)/農林漁業/SOHO		13	4.0	6	4.7	27	10.2	188	5.5
派遣社員・契約社員/パート・アルバイト		83	25.7	25	19.7	56	21.2	737	21.4
専業主婦・主夫		39	12.1	30	23.6	54	20.5	594	17.2
学生		3	0.9	3	2.4	8	3.0	85	2.5
無職		78	24.1	33	26.0	15	5.7	398	11.5
世帯年収									
300万円未満		74	22.4	28	21.5	46	16.9	564	16.0
300-400万円未満		39	11.8	14	10.8	36	13.2	405	11.5
400-700万円未満		74	22.4	34	26.2	67	24.6	872	24.8
700-1,100万円未満		48	14.5	18	13.8	51	18.8	590	16.7
1,100万円以上		14	4.2	7	5.4	16	5.9	226	6.4
無回答(欠損値)		82	24.8	29	22.3	56	20.6	866	24.6
大卒(在学中含む)=1)	***	127	38.4	50	38.5	141	51.8	1,730	49.1
未既婚(既婚(離死別含む)=1)	***	166	50.2	75	57.7	190	69.9	2,216	62.9
子ども									
同居している子どもあり		96	29.0	44	33.8	96	35.3	1,198	34.0
同居していない子どもあり		46	13.9	19	14.6	50	18.4	526	14.9
子どもはいない		189	57.1	67	51.5	126	46.3	1,799	51.1
一人暮らし=1)	***	33	10.0	11	8.5	61	22.4	619	17.6
戸建て=1)	*	201	60.7	83	63.8	153	56.3	1,894	53.8
持家=1)		219	66.2	92	70.8	178	65.4	2,248	63.8
要看護・介護同居家族=1)	***	81	24.5	50	38.5	17	6.3	165	4.7
年に1回以上図書館利用=1)	***	97	29.3	59	45.4	127	46.7	1,206	34.2
年に1回以上観光に出かける=1)	***	173	52.3	92	70.8	200	73.5	2,241	63.6
普段の自分はとても健康である((どちらかといえば)あてはまる)	***	160	48.4	75	57.7	192	70.6	2,513	71.3
経済的に人並の生活水準((どちらかといえば)あてはまる)	***	154	46.5	84	67.6	191	70.2	2,341	66.5
地方紙・地方の新聞(フリーペーパー除く)を読む((どちらかといえば)あてはまる)	***	115	34.8	64	49.2	127	46.7	1,323	37.5
N		331		130		272		3,523	

* : p < .05 ** : p < .01 *** : p < .001

2. 身近な障害者4群とパラスポーツ接触経験および接触意欲のクロス集計

(1) パラスポーツ接触経験

本稿「Ⅲ, 3, (1)」と同様の10項目を用いて身近な障害者の有無4群とパラスポーツ接触経験（する、みる、支える）のクロス集計を行った（表16）。

カイ二乗検定の結果、9項目で0.1%水準、1項目で1%水準の有意差がみられた。10項目に共通して接触経験が多い（「(どちらかといえば) あてはまる」が多い）のは「身内&身

表16 身近な障害者4群とパラスポーツ接触経験のクロス集計

		どちらかといえば				χ ² 値	P値	
		あてはまる	あてはまる	あてはまらない	あてはまらない			
【みる】	身内のみ (n=331)	10.9	14.5	11.8	62.8	77.221	0.000	***
テレビやインターネット（動	身内&身近(n=130)	20.0	23.8	12.3	43.8			
画配信）でパラスポーツの試	身近のみ (n=272)	18.4	17.6	14.0	50.0			
合を見たことがある	いない (n=3,523)	8.6	12.7	11.9	68.0			
【みる】	身内のみ (n=331)	11.2	18.4	10.3	60.1	99.212	0.000	***
テレビやインターネット（動画配	身内&身近(n=130)	28.5	22.3	10.0	39.2			
信）でパラスポーツの競技や選手	身近のみ (n=272)	24.6	25.4	9.9	40.1			
の特集番組等を見たことがある	いない (n=3,523)	11.5	16.9	11.8	59.9			
【みる】	身内のみ (n=331)	11.8	15.4	12.1	60.7	90.615	0.000	***
新聞や雑誌でパラスポーツの	身内&身近(n=130)	23.1	20.0	11.5	45.4			
競技や選手に関する記事を読	身近のみ (n=272)	21.0	23.2	10.3	45.6			
んだことがある	いない (n=3,523)	8.8	15.5	11.4	64.3			
【みる】	身内のみ (n=331)	1.8	3.6	7.6	87.0	70.308	0.000	***
競技場や体育館、スタジアム	身内&身近(n=130)	6.2	9.2	7.7	76.9			
などでパラスポーツを観戦し	身近のみ (n=272)	5.1	5.1	5.9	83.8			
たことがある	いない (n=3,523)	1.4	2.2	9.2	87.3			
【する】	身内のみ (n=331)	2.1	3.0	5.1	89.7	44.945	0.000	***
パラスポーツを体験したこと	身内&身近(n=130)	4.6	6.2	6.2	83.1			
がある	身近のみ (n=272)	4.8	4.8	6.6	83.8			
	いない (n=3,523)	1.2	2.2	7.8	88.7			
【支える】	身内のみ (n=331)	1.2	2.7	4.5	91.5	39.183	0.000	***
パラスポーツのボランティア	身内&身近(n=130)	3.1	5.4	6.9	84.6			
をしたことがある	身近のみ (n=272)	1.8	3.7	7.0	87.5			
	いない (n=3,523)	0.7	1.3	7.7	90.3			
パラスポーツ（元）選手の講	身内のみ (n=331)	0.9	3.0	5.1	90.9	34.635	0.000	***
演を会場で聞いたことがある	身内&身近(n=130)	4.6	5.4	9.2	80.8			
	身近のみ (n=272)	2.9	3.3	7.4	86.4			
	いない (n=3,523)	1.0	2.0	7.7	89.3			
パラスポーツ（元）選手と会	身内のみ (n=331)	1.8	2.7	5.1	90.3	65.014	0.000	***
話をしたことがある	身内&身近(n=130)	5.4	6.2	7.7	80.8			
	身近のみ (n=272)	4.8	4.0	6.6	84.6			
	いない (n=3,523)	1.1	1.5	7.6	89.8			
パラスポーツ（元）選手と一	身内のみ (n=331)	1.5	1.5	5.1	91.8	22.344	0.008	**
緒に写真を撮ったことがある	身内&身近(n=130)	2.3	4.6	7.7	85.4			
	身近のみ (n=272)	1.8	2.2	6.6	89.3			
	いない (n=3,523)	0.7	1.3	7.5	90.5			
パラスポーツ（元）選手の	身内のみ (n=331)	0.6	3.9	5.1	90.3	88.920	0.000	***
SNSをフォローしたり、プロ	身内&身近(n=130)	5.4	5.4	10.8	78.5			
グを閲覧したことがある	身近のみ (n=272)	5.9	4.4	7.4	82.4			
	いない (n=3,523)	0.9	2.0	8.3	88.8			

** : p < .01 *** : p < .001

近」群と「身近のみ」群の順であった。「身内&身近」群あるいは「身近のみ」群はどちらも友人や仕事やボランティア等の継続的な関わりがある近い人に障害がある人である。したがって、障害のある人がパラスポーツにふれる機会の同行や応援等によってパラスポーツ接触経験が多くなる可能性がある。そうすると注目されるべきは「身内のみ」群のパラスポーツ接触経験の低さであろう。「身内のみ」群は、本人および／または同居家族に障害がある人であるから、パラスポーツを経験する機会は例えば「いない」群よりは高いと推測されるが、今回の調査ではそれほど差がなかった。このことが意味しているのは、「身内」にあたる人物（本人および／または同居家族）の障害のあるなしにかかわらず、パラスポーツ接触と一緒に連れ立って行く仲間のような障害のある人が同居人以外にすることがパラスポーツ接触経験にとって重要かもしれないということである。本多（2019）でも今回の調査実施前においても、筆者は身近な障害者の存在がパラスポーツ接触に与える影響が比較的強いと予想していたのに対して、今回の結果からはパラスポーツ接触（する、みる、支える）をとともに連れ立って行く仲間のような障害のある人が同居家族以外にすることがパラスポーツ接触経験に影響を及ぼしている可能性が示された。

(2) パラスポーツ接触意欲

本稿「Ⅲ、3、(2)」と同様の4項目を用いて身近な障害者4群とパラスポーツ接触意欲のクロス集計を行った(表17)。

カイ二乗検定の結果、4項目すべてにおいて0.1%水準で有意差がみられた。接触経験(表16)と同様に、「身内&身近」群、「身近のみ」群の順に高かった。

また2020東京オリパラ接触意欲とのクロス集計を行ったところ、表16や17と同様に「身内

表17 身近な障害者4群とパラスポーツ接触意欲のクロス集計

		どちらかといえば				χ ² 値	P値
		あてはまる	あてはまる	あてはまらない	あてはまらない		
【みる】 競技場や体育館、スタジアム などで観戦したいパラスポ ーツがある	身内のみ (n=331)	3.6	8.2	19.9	68.3	34.387	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	9.2	13.1	27.7	50.0		
	身近のみ (n=272)	8.1	11.8	24.6	55.5		
	いない (n=3,523)	4.0	8.3	25.5	62.2		
【みる】 テレビやインターネット(動 画配信)で観戦したいパラ スポーツがある	身内のみ (n=331)	5.7	16.0	16.6	61.6	85.128	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	16.2	24.6	23.8	35.4		
	身近のみ (n=272)	9.6	25.7	20.2	44.5		
	いない (n=3,523)	5.7	13.9	24.1	56.3		
【する】 体験したいパラスポーツがあ る	身内のみ (n=331)	3.6	9.4	20.5	66.5	59.261	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	10.0	13.8	32.3	43.8		
	身近のみ (n=272)	7.0	14.3	26.5	52.2		
	いない (n=3,523)	3.2	7.9	25.7	63.1		
【支える】 ボランティアや支援者(審判、 スタッフ等)として関わりた いパラスポーツがある	身内のみ (n=331)	1.8	7.6	21.8	68.9	54.501	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	8.5	10.8	30.8	50.0		
	身近のみ (n=272)	5.5	10.7	28.3	55.5		
	いない (n=3,523)	2.1	6.4	26.7	64.9		

*** : p < .001

&身近」群と「身近のみ」群が有意に高いという結果が得られた（表18）。

表18 身近な障害者4群と2020東京オリパラ接触意欲のクロス集計

		どちらかといえば				χ ² 値	P値
		あてはまる	あてはまる	あてはまらない	あてはまらない		
2020東京オリンピックで応援したい選手やチームがある	身内のみ (n=331)	16.9	23.3	13.6	46.2	35.501	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	29.2	23.8	14.6	32.3		
	身近のみ (n=272)	29.0	24.3	16.2	30.5		
	いない (n=3,523)	18.8	22.6	15.8	42.8		
2020東京パラリンピックで応援したい選手やチームがある	身内のみ (n=331)	4.8	13.3	20.5	61.3	67.324	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	12.3	19.2	26.2	42.3		
	身近のみ (n=272)	13.2	18.4	22.8	45.6		
	いない (n=3,523)	5.0	12.4	25.5	57.1		
2020東京オリンピックをテレビやインターネット(動画配信)で観戦したい	身内のみ (n=331)	24.5	29.6	8.8	37.2	40.314	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	36.9	23.8	15.4	23.8		
	身近のみ (n=272)	40.8	28.7	11.4	19.1		
	いない (n=3,523)	29.9	26.9	11.2	31.9		
2020東京パラリンピックをテレビやインターネット(動画配信)で観戦したい	身内のみ (n=331)	9.7	24.2	16.6	49.5	85.078	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	25.4	30.0	14.6	30.0		
	身近のみ (n=272)	19.9	32.7	17.6	29.8		
	いない (n=3,523)	10.6	22.4	21.4	45.6		
2020東京オリンピックを会場で観戦したい(チケットが当選していない場合でも希望の有無)	身内のみ (n=331)	8.2	11.8	16.0	64.0	28.550	0.001 **
	身内&身近(n=130)	13.8	15.4	23.1	47.7		
	身近のみ (n=272)	18.0	15.4	19.1	47.4		
	いない (n=3,523)	11.6	15.1	20.2	53.1		
2020東京パラリンピックを会場で観戦したい(チケットが当選していない場合でも希望の有無)	身内のみ (n=331)	5.1	10.3	17.2	67.4	35.896	0.000 ***
	身内&身近(n=130)	12.3	10.8	26.2	50.8		
	身近のみ (n=272)	10.3	11.8	24.3	53.7		
	いない (n=3,523)	5.1	10.7	24.3	59.9		

** : p < .01 *** : p < .001

身近な障害者の有無別で分析してみると、開催地別（表9）ではみられなかった有意な差がみられた。ただし、「身内&身近」群および「身近のみ」群がパラリンピックだけでなく、オリンピックの接触意欲も高いことから、今回の調査結果に2020東京オリパラの半年前というタイミングの影響が大きいことが表18からも予想される。

3. 身近な障害者4群別パラスポーツ接触経験および接触意欲を従属変数とする重回帰分析

(1) パラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析

身近な障害者4群ごとのパラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析の結果を表19にまとめた。

どのモデルも有意であり、調整済み決定係数（R²）は0.45, 0.35, 0.45, 0.32であった。標準化偏回帰係数（β）をみると、4群すべてにおいて「日常スポーツ接触」が最も強い影響を与えている。「ボランティア関心」が次に続くが、「身近のみ」群だけは「文化資本」が2番目に強い影響を与えている。

表19 身近な障害者4群別パラスポーツ接触経験を従属変数とする重回帰分析

投入変数	身内のみ		身内&身近		身近のみ		いない	
	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値
性別 (男性=1)	0.03	0.526	0.03	0.703	0.02	0.682	-0.01	0.695
年齢 (ref. 50-69歳)								
20-34歳	0.03	0.568	-0.06	0.449	0.12	0.019 *	0.03	0.053 †
35-49歳	0.02	0.644	-0.01	0.867	0.05	0.362	-0.00	0.943
文化資本	0.14	0.005 **	0.16	0.058 †	0.28	0.000 ***	0.13	0.000 ***
日常スポーツ接触	0.41	0.000 ***	0.38	0.000 ***	0.34	0.000 ***	0.31	0.000 ***
ボランティア関心	0.20	0.000 ***	0.24	0.018 *	0.20	0.000 ***	0.21	0.000 ***
地域交流感	0.11	0.026 *	-0.04	0.667	0.08	0.152	0.09	0.000 ***
N	331		130		272		3,523	
p値	p<0.001		p<0.001		p<0.001		p<0.001	
調整済R ²	0.45		0.35		0.45		0.32	

† : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

ここで「身近に障害のある人がいる」ことと文化資本のつながりについて考えてみたい。「身内」(本人および／または同居家族)は当人が基本的には「選択」できない間柄であるのに対して、「身近」(友人等の仕事やボランティア等で継続的関わりがある人)は当人に「選択」の余地がある間柄だといえる。いいかえれば、「身近」は、友人や仕事やボランティア等、少なくとも一方がそうした関係を維持する行動(定期的に会う等)を続けなければ解消されてしまうという点で「選択的」であるといえるだろう。つまり、障害のある人が「身近にいる」と回答する人というのは「身近であり続けている人」ということである²⁾。身近な障害者4群の「文化資本」を従属変数とする一元配置分散分析(F(3, 4252)=19.041, p=0.000, 0.1%水準で有意)ならびにTukeyのHSD法による多重比較の結果、「身内&身近」群(平均値6.13)は「身内のみ」群(同4.44)および「いない」群(同4.67)と比べて、また「身近のみ」群(同6.04)も「身内のみ」群および「いない」群と比べてそれぞれ0.1%水準で有意差がみられた。つまり、「身近」(身近であり続けること)と「文化資本」の高さにはなんらかのつながりがあるのかもしれない。本稿ではこれ以上の考察ができないけれども、オリンピック・パラリンピックの「レガシー」としてめざされる「共生社会の実現」のための道筋のひとつは、「文化資本」と障害者の身近さ(身近であり続けること)とのつながりの解明、そしてつながりがあるならば文化資本の全体的「底上げ」(できるとすれば)にあるのかもしれない。

(2) パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析

次に、パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析の結果を表20にまとめた。

表20 身近な障害者4群別パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析

投入変数	身内のみ		身内&身近		身近のみ		いない					
	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値				
性別（男性=1）	-0.03	0.561	-0.01	0.936	-0.04	0.351	-0.02	0.181				
年齢（ref. 50-69歳）												
20-34歳	0.07	0.129	0.00	0.978	0.08	0.105	0.01	0.412				
35-49歳	0.06	0.214	0.01	0.897	0.06	0.216	0.01	0.518				
文化資本	0.00	0.967	0.22	0.007	**	0.06	0.228	-0.02	0.310			
日常スポーツ接触	0.41	0.000	***	0.29	0.002	**	0.42	0.000	***	0.36	0.000	***
ボランティア関心	0.33	0.000	***	0.30	0.000	***	0.38	0.000	***	0.33	0.000	***
N	331		130		272		3,523					
p値	p<0.001		p<0.001		p<0.001		p<0.001					
調整済R ²	0.41		0.40		0.49		0.34					

†:p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

どのモデルも有意であり、調整済み決定係数（R²）は0.41, 0.40, 0.49, 0.34であった。標準化偏回帰係数（β）をみると、4群すべてで「日常スポーツ接触」と「ボランティア関心」が強い影響を与えている。「文化資本」は「身内&身近」群を除いて有意ではなかった。接触意欲については2020東京オリパラの影響が強いと考えられることから、次に独立変数に「2020東京オリパラ接触意欲」を加えた分析を行った（表21）。なお「2020東京オリパラ接触意欲」は表9の6項目を尺度化した（α=.893）。

表21 身近な障害者4群別パラスポーツ接触意欲を従属変数とする重回帰分析(2020オリパラ接触意欲追加)

投入変数	身内のみ		身内&身近		身近のみ		いない					
	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値	標準化β	p値				
性別（男性=1）	-0.02	0.580	-0.03	0.658	0.00	0.947	0.01	0.373				
年齢（ref. 50-69歳）												
20-34歳	0.11	0.003	**	0.14	0.020	*	0.11	0.004	**	0.07	0.000	***
35-49歳	0.06	0.086	†	0.04	0.429		0.07	0.047	*	0.04	0.001	**
文化資本	-0.02	0.665		0.07	0.275		0.07	0.072	†	-0.00	0.781	
日常スポーツ接触	0.12	0.006	**	0.07	0.318		0.12	0.010	*	0.05	0.000	***
ボランティア関心	0.15	0.001	**	0.14	0.032	*	0.22	0.000	***	0.14	0.000	***
2020オリパラ接触意欲	0.66	0.000	***	0.67	0.000	***	0.59	0.000	***	0.69	0.000	***
N	331		130		272		3,523					
p値	p<0.001		p<0.001		p<0.001		p<0.001					
調整済R ²	0.66		0.66		0.69		0.64					

†:p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

どのモデルも調整済み決定係数（R²）が0.66, 0.66, 0.69, 0.64と1.5倍ほど上昇した。標準化偏回帰係数（β）をみても、4群すべてで「2020東京オリパラ接触意欲」が他の変数より抜きんでて高い。それに伴って「ボランティア関心」がある程度の影響を維持しているの

に対して、「日常スポーツ接触」の影響は「20-34歳」と同程度まで弱くなっている。つまり、表20で「日常スポーツ接触」が有していた影響力の大半は「2020オリパラ接触意欲」によるものと考えられる。冒頭にも述べたとおり、2020東京オリパラ終了の数年後に同様の調査・分析を行うことによって、どのようなパラスポーツ接触意欲が「レガシー」として残っているか否かを表19および表20と比較検討できると考えられる。

V. まとめ

最後に本稿での知見と今後の課題をまとめる。

まず開催地別の分析ではパラスポーツ接触経験について有意差はみられなかった(表7)が、パラスポーツ接触意欲の「みる」と「する」のみで有意差がみられた(表8)。この結果から、開催都市での各種の機運醸成の取組の効果は(まだ)限定的であり、そもそもパラスポーツ接触の絶対数が(まだ)低いため開催地別での分析には限界がみられた。

次に、身近な障害者の有無別の分析では、「身内&身近」群および「身近のみ」群が、「身内のみ」群および「いない」群に比べて、パラスポーツ接触経験(表16)ならびに接触意欲(表17)が有意に高かった。パラスポーツ接触経験および接触意欲は、身近な障害者がまったく「いない」と高まらないが、かといって「身内のみ」でも高まりづらく、「身近」つまり同居家族以外にともに連れ立ってパラスポーツに接触する障害のある人の存在が重要とする示唆が得られた。そのような人が身近にいれば、本人や同居家族に障害があっても(「身内&身近」群)、障害がなくても(「身近のみ」群)、パラスポーツ接触経験および接触意欲が高かった。本稿の分析結果からは、身近な障害者の存在それ自体がパラスポーツ接触を呼び寄せるのではなく、パラスポーツを一緒にみたりプレイする障害のある人が同居家族以外にすることが最もパラスポーツ接触を呼び寄せるといえる。ただし、身近にそのような人がいるかどうかは、障害のある人との「選択的」な関係の継続(コミュニケーションの継続といってもよい)いかにかかっている。この点についてはさらなる検討を必要とするものの、文化資本との関連が垣間見えた。

さらに、パラスポーツ接触意欲に関しては、今回の調査時期が2020東京オリパラ開催半年前の影響がさきわめて強いため、「2020東京オリパラ接触意欲」が取り除かれた数年後に同様の調査を実施することによってどのような「レガシー」が残っているかを検討したい。

謝 辞

本研究は、令和元年度淑徳大学学術奨励研究助成を受けて行われたものである。

また調査計画から分析に至るまで山本功先生および青柳涼子先生(ともに本学コミュニティ政策学部)には示唆に富む多数のご助言を頂いたことにもここに記して感謝申し上げた

い。もちろん、本稿の内容ならびに誤り等については著者がすべての責任を負っている。

注

- 1) パラスポーツに関する調査のため、パラリンピック開催地でもある静岡県を「首都圏」に含めることも検討したものの、「首都圏」としてのまとまり、ならびに統計的分析に耐えるサンプル数確保の点で今回はこのような分類を選択した。
- 2) もちろん、「身内」も必ずしも固定的ではないから必ずしも選択できないとは限らない。例えば同居家族に障害のある人がいた人からすると進学や就職や結婚等の機会に「実家」を離れたことで「身内」から「身近」に転換するし、反対に障害を抱える恋人がいる人からすると結婚によって「身近」から「身内」への転換もありえるし、さらには身内にも身近にも障害者がいなかった人からすると友人や職場の同僚や配偶者等が病気や事故等で障害を抱えるようになった場合には「いない」から「身近」ないし「身内」に転換することになる。しかしながら、上記のような「人生の転機」ともいふべききっかけがなければ、基本的には「身内」は「選択」できない。また、例えば障害者福祉分野やリハビリ分野や特別支援教育分野に務めている人のなかには、もしかすると本人の「意識」としては障害のある人との関わりを続けざるをえない人（仕事のため仕方なく、本意ながら）も含まれるかもしれない（いたとしても極めてごく少数に過ぎないと思われるが）。しかし、本人の意識がどうであれ、そうした仕事（意識ではなく行動）を続けている点は揺るがないため、「身近であり続けている」者と捉えられるだろう。

引用・参考文献

- 藤田紀昭（2016）「障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する調査」同志社大学スポーツ健康科学会『同志社大学スポーツ健康科学』8, 1～13頁。
- 藤田紀昭（2018）「障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識研究 第2報」日本福祉大学スポーツ科学部編『日本福祉大学スポーツ科学論集』1, 23～33頁。
- 藤田紀昭（2019）「パラリンピックに対する人々の意識に関する調査研究」日本福祉大学スポーツ科学部編『日本福祉大学スポーツ科学論集』2, 9～16頁。
- 藤田紀昭・安藤佳代子・兒玉友（2020）「障害者スポーツに関する言葉の認知度に関する研究」日本福祉大学スポーツ科学部編『日本福祉大学スポーツ科学論集』3, 11～20頁。
- 本多敏明（2019）「パラスポーツ接触（する、観る、支える（育てる））の「入口」は何か」淑徳大学総合福祉学部・コミュニティ政策学部『淑徳大学研究紀要』53, 103～120頁。
- 菊幸一・齋藤健司・真山達志・横山勝彦編（2011）『スポーツ政策論』成文堂。
- 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ <https://tokyo2020.org/ja/>
- 日本スポーツ法学会編（2011）『詳解スポーツ基本法』成文堂。
- 日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会（2016）「リオパラリンピック後における国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心 第2回調査結果報告」 <http://para.tokyo/2018/02/20162.html>（最終アクセス2018年10月31日）。
- 笹川スポーツ財団（2018）『地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）』（スポーツ庁委託調査） <http://www.ssf.or.jp/research/report/category5/tabid/1551/Default.aspx>（最終アクセス2018年10月31日）。
- スポーツ庁ホームページ <http://www.mext.go.jp/sports/>。
- 東京都（2018）「『オリンピック・パラリンピック開催、障害者スポーツに関する世論調査』結果」 <http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/01/30/01.html>（最終アクセス2018年10月31日）。
- 渡正（2020）「パラリンピック教育の課題と可能性」体育社会学会『年報体育社会学』1, 96～100頁。

The Relationship between a Familiarity with Disabled Persons and the Experience of and Motivation to Engage in Para-sports Contact whether Playing, Watching or Supporting: Internet Survey Report

HONDA, Toshiaki

In January 2020, an Internet survey on the experience of and motivation to engage in para-sports contact was conducted among 4,000 men and women aged 20-69 in all 47 prefectures. This report presents the results.

As a result of the analysis, (1) there was no significant difference between the host and non-host prefectures. This may be due to the low level of both the experience with and motivation for para-sports. (2) As a result of the comparison of the four groups familiarity with disabled persons, the two groups with people with disabilities higher experience and motivation in para-sports. However, those with disabilities in their “the person himself” and “cohabitation family” did not have a high level of contact with para-sports, suggesting that the presence of disabled persons outside the cohabitation family increases the level of contact with para-sports. (3) The results of multiple regression analysis showed that “daily sports contact,” “cultural capital,” and “volunteer interest” were significant. (4) Because it was six months before the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games, it had a strong influence on para-sport contact. Therefore, it is necessary to conduct a follow-up survey to see how the increase or decrease in the experience of contact with para-sports change in a few years. This study will help us understand one of the “legacies”.